『華厳経』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について

外村　中

はじめに

世界的にもよく知られている仏像であるが、その実体はいまだ必ずしも明らかではないのが、日本の最も代表的な仏像の一つである東大寺大仏（天平勝宝四年〔七五二〕開眼、以下「大仏」と略す）である（図1）。大仏がいずれの仏典に依拠したものであるかについては、従来、おおよそ次のような三つの説が立てられ、現在でも議論が続いている。

従来の説①、大仏は華厳教主像（『華厳経』に依拠した仏像）である。[1]

従来の説②、梵網教主像（『梵網経』に依拠した仏像）である。[2]

従来の説③、梵網と華厳の教主像（どちらにも依拠した仏像）である。[3]

以上で「おおよそ」というのは、その議論において理念的に（あるいは理念的にのみ）そうであるのか、意匠的に（あるいは意匠的にのみ）そうであるのかなど必ずしも明らかではなく、いずれの説に属するものか分類が難しい場合も少なくないからである。けれども、いずれにせよ『華厳経』にもとづく華厳宗の大本山東大寺の本尊である大仏が、実は直接的には『華厳経』ではなく『梵網経』に依拠するものである可能性があることを、如何に考えるべきかが問題になっているのには変わりはない。[4]

では、以上のいずれが正しいかといえば、筆者は基本的には従来の説①をとりたい。ただし、正確には、大仏は六十華厳教主盧舎那

図１　東大寺大仏
（筆者撮影）

像（『六十華厳』に依拠した仏像）であるというべきであり、八十華厳教主毘盧遮那像（『八十華厳』に依拠した仏像）とはいえないであろう。

では、なぜそうかといえば、次のような仮説が立てられそうに思われるからである。

仮説①、大仏造成にあたり、『華厳経』を本（もと）にすることにしたが、実際に本にされたのは『六十華厳』であった。

仮説②、ところが、『六十華厳』の内容には重大な欠落などがあり、その箇所を補うために『梵網経』の内容が援用された。

仮説③、ところが、援用された『梵網経』の内容は、『八十華厳』（延いては梵本大本すなわち『華厳経』本来）の内容とは明らかに違うものである。したがって、大仏は、本はといえば六十華厳教主像として造られたが、結果的には（外見上は）梵網教主像のようにも見えるものになってしまった。

以上のように『六十華厳』の内容の欠落などを補うために意匠的には重要な点で『梵網経』にも依拠しているので、大仏は、現在においては、外見上従来の説②および従来の説③のようにも見えるが、造成された当時においては、あくまで六十華厳教主盧舎那像として造られ、またそのように信じられていたのが事実であろうと筆者は推察する。

そこで、小稿では、まずは『華厳経』とそこに記された宇宙論の

内容を確認し、そして、大仏の意匠について初歩的な考察を行いながら、以上の仮説のように考える理由を整理してみたい。[5] とくに従来の研究では注意が払われていない『六十華厳』と『八十華厳』の内容の相違についてできる限り詳しい分析を試みる。

なお、小稿では、『六十華厳』と『八十華厳』の両仏典を共通して指すときには『華厳経』と、そうではない場合にはそれぞれ『六十華厳』『八十華厳』と表記する。また、『六十華厳』は盧舎那といい、『八十華厳』は毘盧遮那というなど両仏典の用語には違いが見られるが、煩雑になるのを避けるために、仏名や品名などは『六十華厳』のものを優先し、『八十華厳』での名称が異なる場合には（　）内にしめすことを原則とする。

第一章　『華厳経』とその宇宙論

一　『六十華厳』『八十華厳』『梵網経』

『六十華厳』『八十華厳』および『梵網経』とは、それぞれ如何なる仏典であるか確認しておこう。[6]『華厳経』（『大方広仏華厳経』）の漢訳完本は二つあり、一つは『六十華厳』（旧訳あるいは晋訳）と、もう一つは『八十華厳』（新訳あるいは唐訳）と呼ばれる。『六十華厳』は、東晋の仏馱跋陀羅（三五九～四二九）が四一八年から四二〇年に漢訳した六十巻本である。一方、『八十華厳』は、唐の実叉難陀（六五二～七一〇）が六九五年から六九九年に漢訳した八十巻本である。

『六十華厳』出経後記によれば、『六十華厳』は東晋の支法領（生没年不明）が西域の国である于闐で得た梵本によるという。[7]『四分律』序によれば、支法領は「壬辰之年」すなわち東晋の太元十七年（三九二）頃に西域を旅したという。[8] 以上により、『華厳経』の原典である梵本大本は、その頃までに成立していたことが知られる。

鎌田茂雄氏によれば、『華厳経』は各章が独立した経典であったものが四世紀頃に『華厳経』としてまとまったもので、最も古い章は十地品であり、その成立は一世紀から二世紀頃と見られるという。[9]

梶山雄一氏によれば、『華厳経』は四世紀半ば頃までにインドあるいは中央アジアにおいて成立したものである。その原型は二世紀初めには成立していたらしい。また、入法界品と十地品は、もとは単独の経典であったが、大本編纂の時に編入されたもので、『華厳経』の中では最も古く一〇〇年前後に成立という。[10]

『六十華厳』と『八十華厳』の内容の相違について、とくに小稿で議論したい点に関しては、唐の法蔵（六四三～七一二）の『華厳経伝記』に見られる次の解説が参考になろう。それによれば、「新訳『八十華厳』は大周（武周）の時代に于闐が献上したもので、四萬頌を超える。その第一会において説かれる華蔵世界の内容（すなわち『華厳経』の宇宙論）は、旧訳『六十華厳』では欠落があり解

釈ができなかったが、新訳ではその内容がすべて備わり、明らかに理解することができるようになった。……」[11]とある。以上のように、法蔵は『六十華厳』の宇宙論の内容には欠落があることを指摘している。後で見るとおり、その欠落は小さくはなかったようである。

一方、『梵網経』は、望月信亨氏の研究をはじめとする近年の研究により、中国で撰述された偽経であることがほぼ明らかになっている。[12]船山徹氏は、『梵網経』上下二巻は下巻が先に成立したとする望月氏の説を発展させ、上巻成立の下限は五九四年、下巻成立はおよそ四五二年から後三十年ほどの間であろうという。[13]

二　盧舎那と釈迦の関係

華厳教主である盧舎那（毘盧遮那）と釈迦の関係について、見ておこう。四天下（いわゆる須弥山世界のことで、一つの須弥山と四つの大洲などからなり、地球に相当する）においては、盧舎那はすなわち釈迦である。この点をしめす『華厳経』の内容として、たとえば、次があげられよう。[14]『華厳経』如来名号品によれば、盧舎那は、我々の住む四天下においては、釈迦牟尼とも呼ばれるという。[15]すなわち釈迦は盧舎那の異名である。また、『華厳経』入法界品の内容は、摩耶夫人は盧舎那仏の母であり、悉達太子すなわち釈迦の母でもあることをしめす。[16]さらには、『八十華厳』入法界品には、「今の世尊の毘盧遮那」と「今の世尊の釈迦牟尼仏」という表現が見られ、置き換えが可能なようである。[17]なお、『六十華厳』入法界品では、この点については不明である。[18]

三　『華厳経』は法身と色身の二身説

梶山雄一氏によれば、法身の仏とは、色も形もなく、思惟・言語・行為を超えた、虚空に比せられる宇宙の根元的真理としての仏である。一方、色身の仏とは、法身の化身すなわち法身の顕現として具体的な形をもって現れる仏である。このような法身と色身による二身説は、『華厳経』において初めて現れる。二身説の成立は遅くとも二〇〇年前後である。後に四世紀後半から五世紀中頃に瑜伽行唯識学派が法身、受用身（報身）、変化身による三身説を説いたが、『華厳経』は三身説は説いていないという。[19]

『華厳経』において、法身と色身の特徴をよく表している例として、たとえば次があげられよう。『六十華厳』盧舎那仏品によれば、「法身は、しっかりと安定したもので崩れることはなく、すべての多くの法界に充ち満ちている。あらゆるところに多くの色身を現すことができ、臨機応変に衆生を教化して善に導く」[20]という。また、以上に対応する『八十華厳』如来現相品によれば、「仏の身は、特殊なところはなく一様なもので、法界に充ち満ちている。衆生に色身をしめして、臨機応変に心身を調和させ悪行を絶たせる」[21]という。さらに、宝王如来性起品（如来出現品）によれば、法身は虚空のよ

うなものであるという。[22] なお、『探玄記』および『梵網経菩薩戒本疏』によれば、『華厳経』は報身を説かないことを、唐の法蔵も理解していたらしい。[23]

四　法身の盧舎那が在すところ

近年の研究によれば、法身の盧舎那の在すところ（仏事をなすところ）については、たとえば次の二つの解釈が可能なようである。一つは蓮華蔵荘厳世界海（宇宙に花咲く一輪の蓮の花の花托の部分）であるとする解釈で、もう一つは娑婆世界（我々人類が住む三千大千世界）であろうとする解釈である。ここでは、以上の二つの解釈について確認しておこう。なお、法身の盧舎那が在すところについて、あえて一つをとるとすれば、筆者は後者すなわち娑婆世界をとるであろう。その理由は次節で述べる。

まず、蓮華蔵荘厳世界海とする解釈は、次による。たとえば『望月仏教大辞典』によれば、『六十華厳』盧舎那仏品の内容は、盧舎那は蓮華蔵荘厳世界海に住し、そこから十方に光明を放つことを説いているという。[24] なお、盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、蓮華蔵荘厳世界海とは、蓮の花托のことらしい。[25]

一方、娑婆世界であろうとする解釈は、近年では、梶山雄一氏が説くところである。同氏は、『華厳経』にしばしば現れる「蓮華蔵世界」（蓮華蔵荘厳世界海、華蔵荘厳世界海）は、経文の上では明瞭には規定されていないとし、さらには、釈迦牟尼如来と毘盧遮那仏は一体であるとした上で経文を解釈し、蓮華蔵世界とは、マガダ国の寂滅道場のあるこの我々の四大洲を含み、釈迦如来の両足の光明が直接に照らし出すこの我々の三千大千世界であろうとする。[26] なお、娑婆世界であろうとする解釈は、必ずしも近年の解釈ではなく、早くからあったようである。たとえば、鑑真（六八八～七六三）に従って来日した唐僧の思託（生没年不明）が延暦七年（七八八）に撰述した『延暦僧録』東大居士伝に見られる「香水海中、世界種、蓮華蔵世界、盧舎那仏」という表現は、そのことをしめすものであろう。[27] まず「蓮華蔵世界、盧舎那仏」というので、『延暦僧録』が想定している盧舎那の在すところは「蓮華蔵世界」であると理解される。次節で見るように、『八十華厳』華厳世界品によれば、「香水海」の中にある「世界種」の中に「娑婆」があり、そこに在す仏が毘盧遮那であるという。語順および文脈から判断するに、『延暦僧録』の内容は、おそらくこれにもとづくものであろう。したがって、『延暦僧録』が説く盧舎那の在す「蓮華蔵世界」は、「娑婆」と置き換えが可能であり、要するに娑婆世界のことであろうと解釈されるのである。

五　盧舎那が在す娑婆世界

盧舎那が在す娑婆世界について、『八十華厳』華厳世界品は、次

のように説いている。それによれば、「上に向かって仏刹（おそらく三千大千世界）をなす分量もある細かな塵の数ほど多くの世界を過ぎると、娑婆と呼ばれるこの世界に至る。その境界は金剛で飾られている。この世界は、様々な色をした風輪が支える蓮華の網によって保たれている。そのありさまは虚空のようで、天の宮殿がその上を飾りあまねく覆うように広がっている。この世界は、仏刹の十三倍をなす分量もある細かな塵の数ほど多くの世界に取り囲まれている。ここに在す仏がすなわち毘盧遮那如来世尊である[28]」という。

実は以上の内容は、その前後の内容とあわせて、娑婆世界が宇宙のどこに位置するかを『華厳経』が唯一具体的に説く箇所である（本章第七節に後述）。ところが、『六十華厳』では、この箇所が欠落している。また、その前後のテキストには不明な説明と混乱が見られる[29]。筆者は思うに、これが大仏の解釈を難しくしている最も大きな原因であろう。

そして、前節で見たところと関連させて考えるに、娑婆世界のありさまが虚空のようであるというのは、宝王如来性起品（如来出現品）が説く、法身は虚空のようなものであるという点に[30]、さらには、盧舎那仏品（如来現相品）が説く、法身は法界に充ち満ちているという点に[31]、あるいは通じるものかもしれない。そうであれば、娑婆世界は法身の盧舎那の在すところかとも解釈できよう。また、法身の盧舎那の在すところを蓮華蔵荘厳世界海であるとすると、色身である四天下に在す釈迦と関連づけて、娑婆に在す毘盧遮那如来世尊を如何にとらえるべきかよくわからなくなってしまう。さらには、盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、蓮華蔵荘厳世界海は、盧舎那がかつて菩薩行を行ったところであるという[32]。したがって、法身の盧舎那が現在在すところは娑婆世界である可能性の方が大きいのではなかろうかと筆者には思われる。より詳しく正確なところは、今後の研究に委ねたい。

六　娑婆世界は三千大千世界

『華厳経』では、娑婆世界もその他の世界も、要するに世界は三千大千世界（十億の四天下が集まってできた世界）のようである。まずは、娑婆世界から見てみよう。如来名号品によれば、娑婆世界には、十億の四天下があるという[33]。なお、『華厳経』の漢訳原文は、十億を「百億」と表記する[34]。一方、如来光明覚品（光明覚品）によれば、三千大千世界には、十億の閻浮提、十億の弗婆提、十億の拘伽尼、十億の鬱単越があるという[35]。これは、三千大千世界にも十億の四天下があることを意味する。したがって、どちらも十億の四天下によってなるものであるから、娑婆世界はすなわち三千大千世界であると解釈されるのである。

また、如来光明覚品（光明覚品）によれば、娑婆世界以外の世界も三千大千世界であるらしい[36]。というのは、いずれの世界にも十億

の閻浮提など（したがって十億の四天下など）があるといわれるからである。また、『華厳経』にいう仏国土も時に同じく三千大千世界を意味するようである。如来光明覚品（光明覚品）には、「仏国土」と「世界」を置き換えることが可能な内容が見られる。[37] さらには、『六十華厳』では、国土も同じく三千大千世界を意味することがあるらしい。如来名号品には、「国土」と「世界」を置き換えることが可能な内容が見られる。[38]

以上のように、大乗の『華厳経』では、世界は「一つの三千大千世界」を意味するようである。一方、声聞乗の『世記経』や『倶舎論』などでは、世界は「三千大千世界の中にある一つの世界（いわゆる一つの四天下）」のことである。たとえば、『世記経』閻浮提州品や『倶舎論』分別世品の内容は、そのことをしめす。[39]

七　『華厳経』の宇宙論、娑婆世界は蓮の種の中

ここでは、『華厳経』に記された宇宙論の概要を見ておこう。とくに娑婆世界などの世界（すなわち三千大千世界）が蓮の花弁ではなく種の中にあることを確認する。なお、この点に関しては、定方晟氏の研究の成果が大いに参考になろう。[40] 同氏の研究は、『八十華厳』の内容を分析することにより、『華厳経』の宇宙論が蓮の花を想定し説かれたものであることを明らかにしたすぐれた研究であるが、小稿で注目したい『六十華厳』と『八十華厳』の内容の相違については検討されていないので、ここではこの点についてもあわせて考察しておきたい。

『六十華厳』盧舎那仏品（『八十華厳』如来現相品）によれば、[41] 宇宙には無数の蓮の花が咲いている。正確には、「蓮華蔵荘厳世界海」（「華蔵荘厳世界海」）と呼ばれる花托の十方（①東、[42] ②南、③西、④北、⑤東南、⑥西南、⑦西北、⑧東北、⑨下方、⑩上方）に、その他の花托（「世界海」）が無数にあるという。

盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、[43]「蓮華蔵荘厳世界海」と呼ばれる花托をもつ蓮の花は、無数の風輪（空気の層）の上にある水たまりから茎をのばしている。その水たまりを「香水海」という。

盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、[44] 花弁を「金剛山」あるいは「金剛圍山」あるいは「斫迦羅」あるいは「大斫迦羅山」（「金剛輪山」あるいは「大輪圍山」）という。

盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、[45] 花托の上面を「大地」という。

盧舎那仏品（華蔵世界品）によれば、[46] 花托の上面には穴があり、その穴もまた「香水海」という。なお、ここまでは、『六十華厳』と『八十華厳』はともに同じ内容をしめし問題はない。

ところが、ここからは、『六十華厳』には不明な説明と欠落と混乱が見られる。『六十華厳』のここからの問題は重大であろう。この点を明らかにしておくために、冗長となってはしまうが、注に両

仏典の原文を引用する。また、『六十華厳』の内容は理解しがたいので、ここからは『八十華厳』の内容を優先することにする。

『八十華厳』華蔵世界品によれば[47]、穴（「香水海」）は無数にあり、穴には種が入っている。その種を「世界種」という。それぞれの種の中には無数の世界が入っている。種は様々な穴にできるものであるという。一方、『六十華厳』盧舎那仏品では、不明な説明となっており、種（「世界性」）は穴以外のところにもできると読めそうである[48]。また、『八十華厳』では種に相当する言葉が「世界種」と訳されているが、『六十華厳』では「世界性」と訳されており、蓮の種を想定した内容であることは、『六十華厳』の訳からでは直ちには判断しがたいようにも思われる。

『八十華厳』華蔵世界品によれば[49]、「華蔵荘厳世界海」と呼ばれる蓮の花の花托の上面の中央に位置した穴（「香水海」）の中から大きな蓮の花が出て、その上に種（「世界種」）があり、その種の中には無数の「世界」が入っている。世界は層をなし、たとえば二十層をあげれば、その一番下から十三番目の層に「娑婆」と呼ばれる世界があり、そこに在すのが毘盧遮那如来世尊である。そして、それぞれの世界は、上に行くほどより多くの無数の世界に取り囲まれているという。以上により、毘盧遮那如来世尊（すなわち盧舎那）の在す娑婆世界をはじめ無数の三千大千世界が蓮の種の中にあることが確認されるのである。

一方、意味不明となり読みにくくなってしまうが、『六十華厳』盧舎那仏品は[50]、まず、種（「世界性」）と「世界」の関係を明らかにしていない。したがって、世界がどこに位置するかよくわからない。そして、文脈からあるいは種の中かとも思われる十二番目の層までは『八十華厳』と同様なようでもあるが、十三番目の層に「娑婆」は記さず、そこには穴（「香水海」）があり、その中に種が入っているとする。そして、その上の十四番目の層にもまた穴があり種が入っているとするなどの混乱が見られる。そして、そのまま混乱を続け、さらには、二十番目の層には無数の穴と無数の種があるとする。そして、そこまでが一つの集まりで、その十方にある同様な集まりを合わせたすべてが盧舎那が常に法輪を転ずるところであるとする。

以上のように、『六十華厳』は、意味不明かつ『八十華厳』とは大いに異なる内容をしめす。このような『六十華厳』の内容では、「世界性」が蓮の種を想定したものであることもわからなくなってしまうであろう。おそらく以上は、『六十華厳』の訳出にあたり用いられた梵本に欠落などがあったために生じた問題であろうと思われるが、いずれにせよ『六十華厳』では、『華厳経』本来の宇宙論は正確には理解できず、娑婆世界をはじめ三千大千世界が宇宙のどこに位置するか不明である。

思うに、四二〇年に梵本が『六十華厳』に漢訳されて以来、

六九九年に『八十華厳』が完成するまで、中国延いては東アジアの漢字文化圏においては、『華厳経』の宇宙論は正確には理解されていなかったであろう。そして、そのことを記すのが、本章第一節で紹介した唐の法蔵の『華厳経伝記』の内容といえよう。

また、近年『八十華厳』の内容にもとづき『華厳経』の宇宙論を整理した定方氏は、『華厳経』の梵本の成立年代から判断し、仏教の宇宙論は『華厳経』の宇宙論から『梵網経』の宇宙論へと展開したと考え議論を行っているようである。[51] しかしながら、東アジアにおける人々の理解という点から見れば、遅くとも五九四年までに成立したらしい『梵網経』の宇宙論は、『八十華厳』の完成をもって正しく理解されるようになった『華厳経』の宇宙論よりも先に置かれるべきではなかろうか。『梵網経』が中国で撰述された偽経であるらしいことも注意しておく必要があろう。したがって、仏教の宇宙論の歴史的な展開についての定方氏の説には、議論の余地がありそうである。

『八十華厳』華蔵世界品は、続けて「華蔵荘厳世界海」と呼ばれる花托の上面には、さらに同様な種（「世界種」）が無数にあり〈それぞれの種の中に無数の三千大千世界が入っている〉ことをしめし、種名とその中にある世界名およびそれぞれの世界に在す仏名を詳細にあげるが、ここでは省略する。[52]

第二章　大仏の意匠

一　意匠の特徴

大仏は、従来の研究が指摘するとおり、[53]〈それぞれの花弁の中に一つの三千大千世界が入っている〉蓮の花托を象徴する台座に座していると見てよいであろう（図1）。実はこれが大仏の意匠の最大の特徴で、本章でもとくに注目したい点である。なお、台座に取り付けられた花弁には三千大千世界を描いた図（いわゆる蓮弁図）が見られる。それについての詳細は稿を改めるが、それぞれの花弁の最上部には菩薩に囲まれた釈迦が在す情況（図2）が、花弁の下部には三千大千世界の中にあるそれぞれの閻浮提に釈迦が座している情況（図3）が描かれている点は、ここでも重要である。

二　大仏は法身の盧舎那

大仏は、そもそもは色も形もない法身の盧舎那を意匠化したものらしい。大仏は報身であるとする見方が江戸時代以来の通説であるが、家永三郎氏によれば、そうではなく法身と見るべきのようである。同氏によれば、報身とする例は、平安時代以前においてはまったく見出せない。一方、たとえば『三代実録』貞観三年（八六一）三月十四日条所載「東大寺大仏供養会呪願文」は、大仏が法身と考

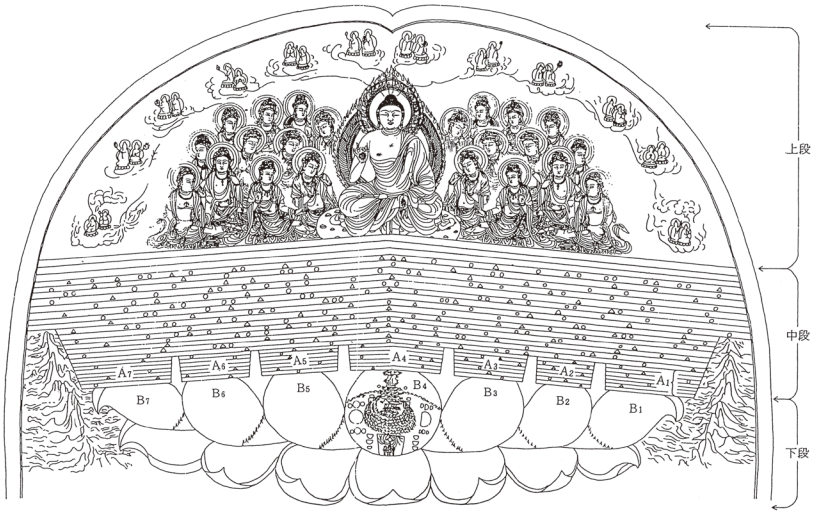

図２　蓮弁概略図

出典：松本伸之「東大寺大仏蓮弁線刻画の図様について」（『南都仏教』55、1986 年）、52 ～ 70 頁、56 頁。

えられていたことを明らかにしめす例であるという。[54] また、同氏によれば、奈良時代の記録においては、大仏は盧舎那とされるのが普通で、稀に毘盧遮那とされる。平安鎌倉時代を通じては、毘盧遮那とされる。大仏を報身とする見方は、鎌倉時代を遡るものではないという。[55] 筆者は思うに、おそらく家永氏のいうとおりであろう。また、より早い時代の記録において、大仏が毘盧遮那より盧舎那と記されている例が多い点は、大仏が毘盧遮那像ではなく盧舎那像として造られたものであることをしめすものであろう。

三　大仏と『梵網経』

ここでは、大仏の意匠は『梵網経』に依拠するものであるらしいことをしめし、大仏は理念的には華厳教主像のはずであるが、少なくとも意匠的には（外見上は）梵網教主像とも見なし得ることを述べる。

東大寺は『華厳経』にもとづく華厳宗の大本山であるから、大仏は理念的には華厳教主像のはずであるとするのは当然であろう。『続日本紀』によれば、天平勝宝元年（七四九）閏五月二十日に、聖武天皇は、『華厳経』を本にして、すべての大乗と小乗の経、律、論、抄、疏、章などを必ず転読し講説し終了させるようにと願ったという。[56] 当時は、そのような情況であった。また、『梵網経』に依拠して大仏を造ったことを直接的に記す記録はいっさい知られない。

図３　蓮弁図四天下（すなわち須弥山世界）
出典：前田泰次ほか『東大寺、大仏と大仏殿』奈良の寺 14（岩波書店、1993 年）、25 頁。

ところが、大仏の意匠に最も符合するのは、『梵網経』の内容である。この点にいち早く気づき他の傍証とあわせて従来の説②を主張したのが、小野玄妙氏である。[57] たとえば、『梵網経』下巻には、「われ盧舎那は今、まさに蓮花台に座そうとするに、台の周りの千花の上に、さらに千人の釈迦を現す（すなわち一花それぞれの上に一人の釈迦を現す）。一花に十億の国があり（すなわち一花は三千大千世界で）、一国それぞれに一人の釈迦がいる。それぞれの釈迦は菩提樹のもとに座し、同時に仏道をなしとげる」[58] とある。なお、以上の原文は「百億」と表記

するが、文脈から判断して、小稿では十億と訳しておく。また、以上では「千花」とあるが、『梵網経』上巻は、「千葉（千の花弁）」とし、「盧舎那と号して、蓮花台蔵世界海にあり。その台の周りにはあまねく千葉がある。一葉が一世界で合わせて千世界をなす。われは千人の釈迦の化身を現し千世界によらせる（すなわち一葉の上に一人の釈迦を現す）。そして一葉の中の世界をなすに、さらに十億の須弥山、十億の日月、十億の四天下、十億の南閻浮提があり（すなわち一葉は三千大千世界であり、一葉の上の釈迦は）十億の菩薩釈迦を現し、十億の菩提樹の下で、それぞれに汝が問うところの菩提薩埵心地を説かせる。その残りの九百九十九葉の上の釈迦も同じようにして、すべてを合わせて千の十億倍の釈迦を現す。千葉の上の釈迦は、われの化身である。千の十億倍の釈迦は、千葉の上の釈迦の化身である。われはすでに本源となり、名づけて盧舎那仏という」[59]と説く。

以上のように、『梵網経』は、千葉ある花弁の〈それぞれの花弁の中に一つの三千大千世界が入っている〉蓮の花托に在す盧舎那を説いている。そして、千葉の花弁のそれぞれの上には一尊の釈迦が在し、さらには、三千大千世界の中にあるそれぞれの閻浮提には一尊の釈迦が座しているとする[60]。これほど大仏の意匠に符合する内容を有する仏典は他に知られない。したがって、大仏は『梵網経』にもとづくとする説を直ちに否定してしまうことは不可能であろう。少なくとも意匠的には（外見上は）梵網教主像とも見なし得る点は認めなければならないであろう。また、次節で見る内容も、大仏を梵網教主像とする従来の説②にとって、非常に都合のよい情報であろう。

四　大仏と『八十華厳』

ここでは、『梵網経』の内容は『八十華厳』の内容と違うものであることを確認した上で、大仏の意匠が『八十華厳』（延いては梵本大本すなわち『華厳経』本来）の内容には符合しないことを述べる。

吉村怜氏は、従来の説②をとる小野玄妙氏や結果的には従来の説③をとる家永三郎氏は『梵網経』が説く盧舎那仏（梵網教主盧舎那仏）と『華厳経』が説く盧舎那仏（華厳教主盧舎那仏）の造形的な違いについては何も説明していないと批判する[61]。そして、梵網教主盧舎那仏と華厳教主盧舎那仏には形態的な違いはないと主張する[62]。しかしながら、『梵網経』と『八十華厳』の内容を比較してみると、吉村氏のいうとおりではなさそうである。

『梵網経』と『八十華厳』の内容に見られる明らかな違いとして、次があげられよう。『梵網経』は、前節で見たように、〈それぞれの花弁の中に一つの三千大千世界が入っている〉蓮の花托に在す盧舎那を説くものである。一方、『八十華厳』は、第一章第四節から第七節で見たように、〈それぞれの種の中に無数の三千大千世界が

入っている〉蓮の花托の中央に位置した種の中にある「娑婆」と呼ばれる三千大千世界に在す毘盧遮那を説くものである。筆者は思うに、以上の違いは決して小さなものではないであろう。そして再び大仏を見るに（図1および図2）、大仏は、〈それぞれの花弁の中に一つの三千大千世界が入っている〉蓮の花托を象徴する台座に座しているものであることは明らかであろう。これは、大仏の意匠が『梵網経』の内容には符合するが、『八十華厳』の内容とは違うことを意味する。この点は見落とされてはならないであろう。ちなみに、大仏が造成された頃、『八十華厳』が重要視されていたとする近年の説がある。たとえば、田村圓澄氏による説がそうである。[63] しかしながら、以上の点から判断するに、大仏の意匠に関する限り、そうではなかったようである。

家永三郎氏によれば、大仏はそもそもは華厳教主像として造られたが、後に『梵網経』に依拠した陰刻がなされたために（いわゆる蓮弁図が描かれたために）矛盾が生じた。大仏と陰刻との間に生じた思想的な矛盾は、両者鋳成の時間的な間隔ならびにその間に起きた時代精神の転化を考えた場合にのみ初めて解決される。その時代精神の転化の契機となったものは、鑑真の渡来による律宗勢力の進出であり、それにより『梵網経』が重んじられるようになったことであるという。[64] なお、『続日本紀』によれば、鑑真の来朝は天平勝宝六年（七五四）一月十六日である。[65] また、奥村秀雄氏によれば、陰刻がなされた時期は、七五六年から七五七年であろうという。[66]

筆者は思うに、両者鋳成に時間的な間隔があったのは、家永氏のいうとおりであろう。しかしながら、陰刻がなされた時点においては、同氏が考えるような矛盾はまだ生じていなかったであろう。というのは、筆者は次節のように考えるからである。

五　大仏と『六十華厳』

ここでは、『梵網経』の内容は『六十華厳』の内容と意匠的には必ずしも違うものではないことを指摘し、大仏が『六十華厳』に依拠したものであると解釈できないことはない理由を述べる。筆者は、この点により、大仏は華厳教主像であるとする従来の説①をとりたい。ただし、正確には『六十華厳』に依拠する華厳教主盧舎那像というべきであろうと考える。

前節で『梵網経』の内容は『八十華厳』の内容と違うことをしめしたが、第一章第七節で見たように、実は『六十華厳』においては『八十華厳』のその内容に相当する箇所が不明であったり欠落したり混乱したりしている。したがって、『六十華厳』では、娑婆世界をはじめ三千大千世界が宇宙のどこに位置するか不明である。これは、〈それぞれの花弁の中に一つの三千大千世界が入っている〉蓮の花托に盧舎那が在すとする『梵網経』の内容を、『六十華厳』は必ずしも否定するものではないことを意味する。それゆえ、大仏は、

厳密には『梵網経』に記された意匠的な内容に依拠したものであろうと思われるが、『六十華厳』に必ずしも違うものではない。したがって、『六十華厳』に依拠したものであると解釈できないことはないのである。本章第三節で見た当時の情況から判断するに、『梵網経』の内容が採用されたのは、積極的に梵網教主像を造ろうとしてのものではなく、『六十華厳』に依拠した華厳教主盧舎那像を造るために援用されただけと見るべきであろうと筆者は考える。詳しくは稿を改めるが、大仏の台座の蓮弁図には、大きな（詳細意匠としてなら最大の）特徴として二十五段の区界が見られる。ところが、それは『梵網経』の内容と符合しない。この点は、大仏が積極的に梵網教主像として造られたものではないことを意味するものであろう。岩上智量氏は、『梵網経』は色界十八天とするので、『梵網経』の説くところと二十五段の区界は齟齬をきたすという。[67] 筆者は思うに、『梵網経』によるのであれば、区界は多くても二十二段（色界の十八段と欲界空居の四段をあわせたもの）のはずである。したがって、同氏のいうとおりであろう。

大仏の意匠と『八十華厳』の内容を比べれば、確かに家永三郎氏も説くように矛盾が認められる。[68] しかしながら、大仏の意匠と『六十華厳』の内容を見る限り、必ずしもそうではないことには注意が払われるべきであろう。大仏が『六十華厳』の盧舎那像であると理解されていた初期においては、矛盾はまだ生じていなかったであろうと筆者は想像する。矛盾が意識されるようになったのは、おそらくは『八十華厳』の内容が詳しく理解されるようになってからであろう。家永氏は、大仏を報身とする見方は、まったく後世の誤解ないし歪曲に過ぎないとする。[69] しかしながら、大仏を報身とする見方が成立したのは、あるいは、『六十華厳』に依拠して造ったつもりの盧舎那像である大仏の意匠が『八十華厳』が説く毘盧遮那についての内容と齟齬をきたすことが意識されるようになったためでもあるかもしれない。この点について詳しいところは、今後の研究を待ちたい。

また、望月信亨氏の研究をはじめとする近年の研究により、『梵網経』が偽経であることがほぼ明らかになっている。以上で考察したところから判断するに、『梵網経』が撰述されるにあたっては、『六十華厳』では娑婆世界をはじめ三千大千世界（延いては盧舎那の在すところ）が宇宙のどこに位置するかわからないことが意識されていた可能性はあろう。四二〇年に梵本が『六十華厳』に漢訳されて以来、六九九年に『八十華厳』が完成するまで、『華厳経』の宇宙論が正確には理解できない状況にあっては、『梵網経』は『六十華厳』に記された盧舎那と同じ名の盧舎那の在すところを明確に説いているので、大いに参考にされることはあったであろう。おそらくは、『六十華厳』が抱える問題を解決するために、『六十華厳』が説く盧舎那像を造る時には、早くから『梵網経』の内容が援用され

ていたのではなかろうかと筆者は推察する。この点についても詳しいところは後考に委ねたい。

おわりに

小稿では、『華厳経』の宇宙論と東大寺大仏の意匠について、初歩的な考察を行った。そして、大仏は六十華厳教主盧舎那像であろうと思われる理由をしめした。小稿を締めくくるにあたり、冒頭にあげた仮説について、確認しておこう。

《仮説①、大仏造成にあたり、『華厳経』を本にすることにしたが、実際に本にされたのは『六十華厳』であった》。以上については、第二章第三節で見たように、『続日本紀』によれば、『華厳経』が本にされていたようである。そして、第二章第四節および第五節で見たように、大仏の意匠は、『八十華厳』の内容に違うが、『六十華厳』の内容と齟齬をきたすものではないようである。これらの点は、以上の仮説が成立し得ることをしめすものであろう。

《仮説②、ところが、『六十華厳』の内容には重大な欠落などがあり、その箇所を補うために『梵網経』の内容が援用された》。以上については、第一章第七節で見たように、『六十華厳』では、我々人類が住む娑婆世界をはじめ三千大千世界が宇宙のどこに位置するか不明である点を見落としてはならないであろう。おそらく意匠的には『六十華厳』の内容とは齟齬をきたさず、盧舎那の在すところを明快に説くものであると当時理解されていたゆえに、『梵網経』の内容が大仏の意匠に援用されたのであろう。また、第二章第三節および第五節で見たように、大仏の意匠は『梵網経』によるものであろうが、積極的に梵網教主像を造ろうとしたわけではないようである。したがって、筆者は、大仏は六十華厳教主盧舎那像というべきであろうという条件を付けて、従来の説①をとりたい。

《仮説③、ところが、援用された『梵網経』の内容は、『八十華厳』（延いては梵本大本すなわち『華厳経』本来）の内容とは明らかに違うものである。したがって、大仏は、本はといえば六十華厳教主像として造られたが、結果的には（外見上は）梵網教主像のようにも見えるものになってしまった》。以上については、第二章第四節で、大仏の意匠は、『梵網経』の内容には符合するが、『八十華厳』の内容には違うことを明らかにしたつもりである。

筆者は思うに、今日我々は『八十華厳』をもって大仏を見るために、大きな問題が生じているのではなかろうか。『六十華厳』をもってすれば、必ずしもそうではないであろう。いずれにせよ、小稿で考察したところから判断するに、大仏の意匠を決定するにあたり、『六十華厳』の内容を補うために、当時における盧舎那の解釈に従い、結果的には『梵網経』（中国において撰述された偽経）の内容が援用されたらしい。そしてそのために、大仏の意匠は『華厳

経』本来の内容とは違うものになってしまったようである。もし以上が事実であれば、その違いを大きなものと見るか小さなものと見るか、我々は改めて議論する必要が出てくるであろう。けれどもその前に、ではなぜ『八十華厳』の内容を参照しなかったのかについても明らかにしておかなければならないであろう。

注

（1）近年の代表的な説として、次があげられよう。吉村怜「東大寺大仏・梵網教主説批判」（『奈良美術研究』一、二〇〇四年）、三～二二頁。

（2）最も代表的な説であり、この議論がはじまる契機をもたらした重要な論考が次である。小野玄妙「東大寺大佛蓮瓣の刻畫に見ゆる佛教の世界説」（『考古學雜誌』第五巻第八號、一九一五年）、五一三～五一九頁。

（3）代表的な説として次があげられよう。岩上智量「東大寺本尊に就て」（『密教研究』六十七、一九三八年）、二三七～二四三頁。

（4）先学の研究がそれぞれいずれに分類されるかについては、次が参考になろう。吉村、注1前掲論文、二〇〇四年、三頁上下。

（5）小稿作成にあたっては、データベースとしてCBETA電子佛典集成を利用し『大正新脩大蔵経』と対照する。なお、句読など、筆者の判断で改めるところもある。また、表記が長くなってしまうが、個々の表現よりは文脈をもって読まなければならない『華厳経』の文章の性格と検証の便を考えて、慣例に準拠し『大正新脩大蔵経』における該当箇所をしめしておくことにする。

（6）基礎的な情報は、たとえば次を参照。望月信亨編、塚本善隆ほか増補『望月佛教大辭典』（世界聖典刊行協会、一九六〇年増訂三版）。鎌田茂雄ほか編『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年）。

（7）『六十華厳』（巻六十）大正九、七八八中。

（8）『四分律』（巻一）大正二十二、五六七上。

（9）鎌田、注6前掲書、鎌田茂雄解説、七九頁上。

（10）梶山雄一『神変と仏陀観・宇宙論』梶山雄一著作集第三巻（吹田隆道編、春秋社、二〇一二年）、九三頁、一一九～一二〇頁、一二七頁、二二〇頁。

（11）『華厳經傳記』（巻一）大正五十一、一五三下「今大周于闐所進。逾四萬頌。於第一會所説。華藏世界。舊譯闕略。講解無由。今文並具。爛然可領。……」。

（12）望月信亨『佛教經典成立史論』（法藏館、一九四六年）、四四一～四七一頁。大野法道『大乗戒經の研究』（理想社、一九五四年）、二五二～二八七頁。

（13）船山徹「梵網経下巻先行説の再検討」（『三教交渉論叢續編』京都大学人文科学研究所、二〇一一年）一二七～一五六頁、一五五頁。

（14）次を参照。中村元ほか編『岩波仏教辞典』（岩波書店、一九八九年）、毘盧遮那、六八二～六八三頁。『望月佛教大辭典』毘盧遮那、四三六七～四三六九頁。

（15）『六十華厳』（巻四）大正九、四一九上。『八十華厳』（巻十二）大正十、五八下。

（16）『六十華厳』（巻五十六）大正九、七五三下。『六十華厳』（巻五十七）大正九、七六三下。『八十華厳』（巻七十四）大正十、四〇四下。『八十華厳』（巻七十六）大正十、四一五下。『八十華厳』（巻七十六）大正十、四一六中。

（17）『八十華厳』（巻七十六）大正十、四一六中。『八十華厳』（巻七十六）大正十、四一七上。

（18）『六十華厳』（巻五十七）大正九、七六四上～七六四下。『六十華厳』（巻五十七）大正九、七六四下。

（19）梶山、注10前掲書、三五頁、四九頁、九五頁、一四四頁～一四六頁、二一二頁～二一三頁、二二三頁、三三〇頁。

(20) 『六十華厳』(巻三) 大正九、四〇八中「法身堅固不可壊。充満一切諸法界。普能示現諸色身。隨應化導諸群生」。

(21) 『八十華厳』(巻六) 大正十、三一上「佛身無差別。充滿於法界。能令見色身。隨機善調伏」。

(22) 『六十華厳』(巻三十四) 大正九、六一六上「虚空無形色故。如來法身亦復如是。……譬如虚空彌廣。悉能容受一切衆生。而無染著。如來法身亦復如是」。『八十華厳』(巻五十) 大正十、二六六上「虚空無身故。如來身亦如是。……譬如虚空。寛廣非色。而能顕現一切諸色。而彼虚空。無有分別。亦無戯論。如來身亦復如是」。

(23) 『探玄記』(巻三) 大正三十五、一四六下「此舎那佛。非局報身」。『梵網經菩薩戒本疏』(巻一) 大正四十、六〇六上「依華厳經。無成無不成故。盧舎那一切處。皆實身成佛。又以盧舎那。則是釈迦。不分報化二位之別」。

(24) 『望月佛教大辞典』毘盧遮那、四三六七頁。次を参照。『六十華厳』(巻二) 大正九、四〇五中～四〇五下。『八十華厳』(巻六) 大正十、二六中～二七上。

(25) 『六十華厳』(巻三) 大正九、四一二中。『八十華厳』(巻八) 大正十、三九中。

(26) 詳しくは、次を参照。梶山、注10前掲書、一三八～一四一頁。ただし、同氏はこの箇所の議論において「娑婆世界」を「三千大千世界」と表記する。

(27) 『延暦僧録』東大居士傳(『東大寺要録』巻二)。

(28) 『八十華厳』(巻八) 大正十、四三上～四三中「此上過佛刹微塵數世界。至此世界。名娑婆。以金剛莊厳爲際。依種種色風輪所持蓮華網住。狀如虚空。以普圓滿天宮殿莊厳虚空。而覆其上。十三佛刹微塵數世界。周匝圍遶。其佛即是毘盧遮那如來世尊」。

(29) 次を参照。『探玄記』(巻三) 大正三十五、一六四下～一六五上。

(30) 『六十華厳』(巻三十四) 大正九、六一六上。『八十華厳』(巻五十) 大正十、二六六上。

(31) 『六十華厳』(巻三) 大正九、四〇八中。『八十華厳』(巻六) 大正十、三一上。

(32) 『六十華厳』(巻三) 大正九、四一二上。『八十華厳』(巻七) 大正十、三九上。

(33) 『六十華厳』(巻四) 大正九、四一九下。『八十華厳』(巻十二) 大正十、五九中。

(34) 次を参照。『探玄記』(巻四) 大正三十五、一七四下。

(35) 『六十華厳』(巻五) 大正九、四二二中。『八十華厳』(巻十三) 大正十、六二中。

(36) 『六十華厳』(巻五) 大正九、四二三上～四二六中。『八十華厳』(巻十三) 大正十、六三上～六五下。とくに次の内容は、「百萬」の次の単位が「一億」であることをもしめす。これは、『華厳経』にいう「百億」が実は十億のことであることを意味するものである。『六十華厳』(巻五) 大正九、四二五上。『八十華厳』(巻十三) 大正十、六五上。

(37) 『六十華厳』(巻五) 大正九、四二三上～四二三中。『八十華厳』(巻十三) 大正十、六三上～六三中。

(38) 『六十華厳』(巻四) 大正九、四一九下～四二〇中。『八十華厳』(巻十二) 大正十、五九中～六〇上。

(39) 『長阿含經』(巻一八) 大正一、一一四中～一一四下。『阿毘達磨倶舎論』(巻十一) 大正二十九、五七中。

(40) 定方晟『インド宇宙論大全』(春秋社、二〇一一年)、二四七～二八五頁。

(41) 『六十華厳』(巻二) 大正九、四〇五下～四〇六下。『六十華厳』(巻三) 大正九、四〇七上～四〇七中。『六十華厳』(巻三) 大正九、四一二中。なお、『八十華厳』では、⑤東北、⑥東南、⑦西南、⑧西北の順となる。『八十華厳』(巻六) 大正十、二六下～二八下。『八十華厳』(巻八) 大正十、三九中。

(42) 次には、西域では東が上位であるとする指摘が見られる。『探玄記』(巻三) 大正三十五、一五二上。

(43) 『六十華厳』(巻三) 大正九、四一二上～四一二中。『八十華厳』(巻八)

大正十、三九上～三九中。

(44) 『六十華嚴』(巻三) 大正九、四一二中～四一三上。『八十華嚴』(巻八) 大正十、三九中～四〇上。

(45) 『六十華嚴』(巻三) 大正九、四一三上。『八十華嚴』(巻八) 大正十、四〇上。次を参照。『探玄記』(巻三) 大正三十五、一六三下。

(46) 『六十華嚴』(巻三) 大正九、四一三中。『八十華嚴』(巻八) 大正十、四〇中。

(47) 『八十華嚴』(巻八) 大正十、四一下～四二上「此不可説佛刹微塵數香水海中。有不可説佛刹微塵數世界種安住。一一世界種。復有不可説佛刹微塵數世界。諸佛子。彼諸世界種。於世界海中。各各依住。各各形狀。各各體性。各各方所。各各趣入。各各莊嚴。各各分齊。各各行列。各各無差別。各各力加持。諸佛子。此世界種。或有依大蓮華海住。或有依無邊色寶華海住。或有依一切真珠藏寶瓔珞海住。或有依香水海住。或有依一切華海住。或有依摩尼寶網海住。或有依漩流光海住。或有依菩薩寶莊嚴冠海住。或有依種種眾生身海住。或有依一切佛音聲摩尼王海住。如是等。若廣説者。有世界海微塵數」。

(48) 『六十華嚴』(巻三) 大正九、四一四上～四一四中「(彼大地處。有不可説佛刹微塵等香水海。)……此香水海上。有不可説佛刹微塵數世界性住。或有世界性蓮華上住。或在無量色蓮華上住。或依真珠寶住。或依諸寶網住。或依種種眾生身住。或依佛摩尼寶王住」。

(49) 丸数字は筆者が挿入。『八十華嚴』(巻八) 大正十、四二中～四三下「此不可説佛刹微塵數香水海。在華藏莊嚴世界海中。如天帝網。分布而住。諸佛子。此最中央香水海。名無邊妙華光。以現一切菩薩形。摩尼王幢爲底。出大蓮華。名一切香摩尼王莊嚴。有世界種。而住其上。名普照十方熾然寶光明。以一切莊嚴具爲體。有不可説佛刹微塵數世界。於中布列。①其最下方有世界。名最勝光遍照。以一切金剛莊嚴光耀輪爲際。依眾寶摩尼華而住。其狀猶如摩尼寶形。一切寶華莊嚴雲。彌覆其上。佛刹微塵數世界。周匝圍遶。種種安住。種種莊嚴。佛號淨眼離垢燈。②此上過佛刹微塵數世界。有世界。名種種香蓮華妙莊嚴。以一切莊嚴具爲際。依寶蓮華網而住。其狀猶如師子之座。一切寶色珠帳雲。彌覆其上。二佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號師子光勝照。③此上過佛刹微塵數世界。有世界。名一切寶莊嚴普照光。以香風輪爲際。依種種寶華瓔珞住。其形八隅。妙光摩尼日輪雲。而覆其上。三佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號淨光智勝幢。④此上過佛刹微塵數世界。有世界。名種種光明華莊嚴。以一切寶王爲際。依眾色金剛尸羅幢海住。其狀猶如摩尼蓮華。以金剛摩尼寶光雲。而覆其上。四佛刹微塵數世界。周匝圍遶純一清淨。佛號金剛光明無量精進力善出現。⑤此上過佛刹微塵數世界。有世界。名普放妙華光。以一切寶鈴莊嚴網爲際。依一切樹林莊嚴寶輪網海住。其形普方。而多有隅角。梵音摩尼王雲。以覆其上。五佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號香光喜力海。⑥此上過佛刹微塵數世界。有世界。名淨妙光明。以寶王莊嚴幢爲際。依金剛宮殿海住。其形四方。摩尼輪髻帳雲。而覆其上。六佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號普光自在幢。⑦此上過佛刹微塵數世界。有世界。名眾華焰莊嚴。以種種華莊嚴爲際。依一切寶色焰海住。其狀猶如樓閣之形。一切寶色衣真珠欄楯雲。而覆其上。七佛刹微塵數世界。周匝圍遶。純一清淨。佛號歡喜海功德名稱自在光。⑧此上過佛刹微塵數世界。有世界。名出生威力地。以出一切聲摩尼王莊嚴爲際。依種種寶色。蓮華座虛空海住。其狀猶如因陀羅網。以無邊色華網雲。而覆其上。八佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號廣大名稱智海幢。⑨此上過佛刹微塵數世界。有世界。名出妙音聲。以心王摩尼莊嚴輪爲際。依恒出一切妙音聲莊嚴雲摩尼王海住。其狀猶如梵天身形。無量寶莊嚴師子座雲。而覆其上。九佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號清淨月光明相無能摧伏。⑩此上過佛刹微塵數世界。有世界。名金剛幢。以無邊莊嚴真珠藏寶瓔珞爲際。依一切莊嚴寶師子座摩尼海住。其狀周圓。十須彌山微塵數一切香摩尼華須彌雲。彌覆其上。十佛刹微塵數世界。周匝圍遶。純一清淨。佛號一切法海最勝王。⑪此上過佛刹微塵數世界。有世界。名恒出現帝青寶光明。以極堅牢不可壞金剛莊嚴爲際。依種種殊異華海住。

其狀猶如半月之形。諸天寶帳雲。而覆其上。十一佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號無量功德法。⑫此上過佛刹微塵數世界。有世界。名光明照耀。以普光莊嚴爲際。依華旋香水海住。狀如華旋。種種衣雲。而覆其上。十二佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號超釋梵。⑬此上過佛刹微塵數世界。至此世界。名娑婆。以金剛莊嚴爲際。依種種色風輪所持蓮華網住。狀如虛空。以普圓滿天宮殿莊嚴虛空。而覆其上。十三佛刹微塵數世界。周匝圍遶。其佛即是毘盧遮那如來世尊。⑭此上過佛刹微塵數世界。有世界。名寂靜離塵光。以一切寶莊嚴爲際。依種種寶衣海住。其狀猶如執金剛形。無邊色金剛雲。而覆其上。十四佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號遍法界勝音。⑮此上過佛刹微塵數世界。有世界。名眾妙光明燈。以一切莊嚴帳爲際。依淨華網海住。其狀猶如卍字之形。摩尼樹香水海雲。而覆其上。十五佛刹微塵數世界。周匝圍遶。純一清淨。佛號不可摧伏力普照幢。⑯此上過佛刹微塵數世界。有世界。名清淨光遍照。以無盡寶雲。摩尼王爲際。依種種香焰蓮華海住。其狀猶如龜甲之形。圓光摩尼輪栴檀雲。而覆其上。十六佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號清淨日功德眼。⑰此上過佛刹微塵數世界。有世界。名寶莊嚴藏。以一切眾生形。摩尼王爲際。依光明藏摩尼王海住。其形八隅。以一切輪圍山寶莊嚴華樹網。彌覆其上。十七佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號無礙智光明遍照十方。⑱此上過佛刹微塵數世界。有世界。名離塵。以一切殊妙相莊嚴爲際。依眾妙華師子座海住。狀如珠瓔。以一切寶香摩尼王圓光雲。而覆其上。十八佛刹微塵數世界。周匝圍遶。純一清淨。佛號無量方便最勝幢。⑲此上過佛刹微塵數世界。有世界。名清淨光普照。以出無盡寶雲摩尼王爲際。依無量色香焰須彌山海住。其狀猶如寶華旋布。以無邊色光明摩尼王帝青雲。而覆其上。十九佛刹微塵數世界。周匝圍遶。佛號普照法界虛空光。⑳此上過佛刹微塵數世界。有世界。名妙寶焰。以普光明日月寶爲際。依一切諸天形摩尼王海住。其狀猶如寶莊嚴具。以一切寶衣幢雲及摩尼燈藏網。而覆其上。二十佛刹微塵數世界。周匝圍遶。純一清淨。佛號福德相光明。……此一一世界。各有十佛刹微塵數。廣大世界。周匝圍遶。此諸世界。一一復有如上所説微塵數世界。而爲眷屬」。

(50) 丸数字は筆者が挿入。『六十華厳』(巻四)大正九、四一四中〜四一五上「彼眾香水海中有一香水海。名樂光明。有一切香摩尼寶王莊嚴蓮華。①上有世界。名清淨寶網光明。佛號離垢淨眼廣入。②彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名雜香蓮華勝妙莊嚴。依寶網住。形如師子座。佛號師子座光明勝照。③彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名寶莊嚴普光明。依諸華住。形如日輪雲。佛號廣大光明智勝。④彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名雜光蓮華。佛號金剛光明普精進善起。⑤彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名無畏嚴淨。佛號平等莊嚴妙音幢王。⑥彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名華開淨焰。佛號愛海功德稱王。⑦彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名總持。佛號淨智慧海。⑧彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名解脫聲。佛號善相幢。⑨彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名勝起。佛號蓮華藏光。⑩彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名善住金剛不可破壞。佛號那羅延不可破壞。⑪彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名華林赤蓮華。佛號雜寶華鬘智王。⑫彼世界上。過佛刹塵數世界。有佛國。名淨光勝電如來藏。佛號能起一切所願功德。⑬彼世界上。有香水海。名淨光焰起。中有世界性。名善住。⑭次上復有香水海。名金剛眼光明。中有世界性。名法界等起。⑮次上復有香水海。名蓮華平正。中有世界性。名出十方化身。⑯次上復有香水海。名寶地莊嚴光明。中有世界性。名寶枝莊嚴。⑰次上復有香水海。名化香焰。中有世界性。名清淨化。⑱次上復有香水海。名寶幢。中有世界性。名佛護念。⑲次上復有世界性。名眾色普光。⑳如是次上。復有世界塵數香水海及世界性。如一方。十方亦如是。盧舎那佛常轉法輪處」。

(51) 定方、注40前掲書、二七五〜二七六頁。

(52) 次を参照。定方、注40前掲書、二五四〜二七三頁。また、娑婆世界の中にある四天下の内の情況については、筆者は次で基礎的な情報を整理したことがある。Ataru Sotomura: Mt. Sumeru [須彌山] : Source Manual for Iconographic Research on the Buddhist Universe. Singapore: Nalanda-Sriwijaya Centre Working

Paper No. 6, 2011.

(53) たとえば次を参照。小野、注2前掲論文、五一三〜五一九頁。

(54) 家永三郎『上代佛教思想史研究』（畝傍書房、一九四二年）、二三六〜二三七頁。『日本三代實録』巻五、貞観三年三月十四日戊子条。なお、大仏を報身とする説として、次がある。大屋徳城『寧樂佛教史論』（東方文獻刊行會、一九三七年）、一九六〜一九七頁。

(55) 家永、注54前掲書、二三八〜二四一頁。

(56) 『續日本紀』巻十七、天平勝寶元年閏五月癸丑詔。

(57) 小野、注2前掲論文、五一三〜五一九頁。

(58) 『梵網經』（巻二）大正二十四、一〇〇三下〜一〇〇四上「我今盧舍那。方坐蓮花臺。周匝千花上。復現千釋迦。一花百億國。一國一釋迦。各坐菩提樹。一時成佛道」。

(59) 『梵網經』（巻一）大正二十四、九九七下「號爲盧舍那。住蓮花臺藏世界海。其臺周遍有千葉。一葉一世界爲千世界。我化爲千釋迦。據千世界。後就一葉世界。復有百億須彌山。百億日月。百億四天下。百億南閻浮提。百億菩薩釋迦。坐百億菩提樹下。各説汝所問。菩提薩埵心地。其餘九百九十九釋迦。各各現千百億釋迦。亦復如是。千花上佛。是吾化身。千百億釋迦。是千釋迦化身。吾已爲本原。名爲盧舍那佛」。

(60) 菩提樹が閻浮提にあることは、次を参照。『梵網經』（巻二）大正二十四、一〇〇三中。『梵網經』（巻二）大正二十四、一〇〇三下。

(61) 吉村怜「東大寺大仏の仏身論——蓮華蔵荘厳世界海の構造について」（『仏教芸術』二四六、毎日新聞社、一九九九年）四一〜六八頁、四七頁上、四九頁下、五〇頁上。

(62) 吉村、注61前掲論文、一九九九年、五三頁下、五四頁下。吉村、注1前掲論文、二〇〇四年、六頁上。

(63) 田村圓澄『古代日本の国家と仏教——東大寺創建の研究』（吉川弘文館、一九九九年）、二一四〜二一八頁。なお、以上は東大寺創建についての総合的な研究として重要な文献の一つである。

(64) 家永、注54前掲書、二二六〜二五九頁、二四六〜二四八頁。

(65) 『續日本紀』巻十九、天平勝寶六年正月壬子条。

(66) 奥村秀雄「東大寺大仏蓮弁毛彫図の研究」（『東京国立博物館紀要』十二、一九七六年）、一六一〜二三五頁、二一〇〜二二四頁。

(67) 岩上、注3前掲論文、二四一〜二四二頁。

(68) 家永、注54前掲書、二二六〜二五九頁、二四六〜二四八頁。

(69) 家永、注54前掲書、二四一頁。

後記

小稿は、白幡洋三郎先生が国際日本文化研究センターで主宰されていた研究班「日本庭園のあの世とこの世〈自然、芸術、宗教〉」における筆者の担当テーマであった「仏教宇宙論と日本庭園」についての研究の成果の一部を発展させたものである。小稿作成にあたり、阪田宗彦先生、平岡昇修先生にご指導ご協力などをいただいた。記して謝意を申し上げたい。